
マロなお嬢と、召使い。

蛇足

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マロなお嬢と、召使い。

【Nコード】

N8192X

【作者名】

蛇足

【あらすじ】

江戸幕府が長きに渡り権力を誇示し続けている世界では、神は人に仕えるという。そんな世界で出会った、武士の娘でありながら京の都で育ったが故に磨^{マロ}気質になってしまったお嬢様と、お嬢様に仕える記憶喪失の少年の話。

はじめに

とある世界には、日本が米国に負ける歴史があるという。

またとある世界には、日本が米軍に勝つ歴史があるという。

動物が生きる世界はひとつではない。

世界はいくつも存在しているという。

これは、江戸幕府が黄龍と青龍・白虎・朱雀・玄武を味方に
つけ、今上帝と宮家が日本を守る神々を味方に付け、『不沈の島』と

列強諸国より恐れられ、長く長く幕府による統治が続いた世界の話。

史実、時代背景まったくの無視で、その他日本神話についてもまったく無視しておりますので、突っ込みたいところ満載かもしれないかもしれませんが、せんがお許しください。

1 黄河

冬の夜空に星がきらめく。

吐いた息は瞬時に白く濁り、鼻の頭や耳はじんじんと痛む。

向かいから流れてくる強い北風が、“俺が”身に纏った鮮やかな色合いの“振り袖”をさらって逃げていく……

この寒さでは雪が降るのも時間の問題だ。

(…早く用事を済ませて店に戻ろう。)

草履の鼻緒に足をぐっと押し込んで、着物がはだけないように小走りです的地へと向かう…

しかし、少年はすぐに来た道に戻る事となった。

「お黄こちゃん！待ってえ」

自分を必死にに追いかける足音に気付いたからだ。

「胡蝶さん？」

着物の裾を翻して走る彼女のもとに駆け寄ると、胡蝶は力が抜けたかのように地べたに座りこんでしまった。

「胡蝶さん?!」

慌てて顔色を伺うと、彼女は自嘲ぎみに笑って顔の前で手を横に振った

「大丈夫…。ただ走って疲れただけ。」

「でも…」

「大丈夫だったら大丈夫。それよりこんな道の真ん中でしゃがみこんでる方がダメね。」

ふと顔を上げて周りを見ると、綺麗に着飾った派手な着物の二人組を囲うように人だかりができてはじめていた…

『ありや秀華屋の胡蝶じゃないか?』

誰かが一言呟いた瞬間

『秀華屋の胡蝶が見れる』

今夜の江戸はこの話題で持ちきりになった。

江戸の街の中でも5本指に入る高級店秀華屋のトップ胡蝶は、幕府

の上層部の“酒の相手しか”しないお高い女として有名だった。

それがこんな街中でお目にかかれる…というのが、民衆の気持ちだった。

「あなたはもう少し考えて行動してください。」

あのあと、すぐにその場を離れ、店の裏口から胡蝶を部屋に戻して、“お黄”こと黄河こひがは説教を始めていた。

胡蝶は、客以外…男子禁制である秀華屋に男である黄河が忍び込んでいるという秘密を知っている数少ない者のうちの一人だ。

「まあまあ、黄河くん、そんなに怒らないで」

「怒らないでってあなたがっ！」

イライラする黄河の口もとに、胡蝶は人差し指をあてる

「男の子はそう怒鳴るものじゃないわ。」

（この人はっ！！）

心の中で悶絶する黄河を知ってか知らずか、胡蝶は唇から指を離し、一冊の本を取り出した

「黄河くん探したら、料理人さんが『黄河なら、ついさつき山田酒店にお使いに行った』っていうから、これを源げんさんに届けて欲しくて慌てて追いかけたの。」

差し出された本には、ただ一言『東京』と書かれていて、作者の名前などは一切ない。

「分かりました。届けますから、あなたは大人しくしてください。」

受け取ったものを丁寧に風呂敷にくるむ。その姿を眺めていた胡蝶が申し訳なさそうに口を開いた

「あともうひとつお願いなんだけど、あの子が元気にしてるか…見えてきてね。」

「そちらは言われなくても分かっていますよ。じゃあ行ってきます。」

「うん。気をつけて。」

一番上の階に作られた胡蝶の部屋から、一番下の階に下り土間に草履をおろして鼻緒にぐつと足を押し付ける。

重い引き戸をゆっくりと開けて、外に踏み出すと、予想通り、雪が降っていた。

(…寒い。だから早く済ませて帰ろうと思っていたのに…胡蝶さんの阿呆。)

手にしていた風呂敷を抱え直して、黄河は、我が物顔で歩く酔っぱらいの往来の中を縫うようにして歩いていった。

胡蝶さんが源さんに渡して欲しいと俺に託した風呂敷の中身…正直、胡蝶さんがこんなもの読んでいたなんて驚きだ。

『東京』という本は、著者不明の本で

我々が江戸と呼んでいる街を、東京と呼ぶ世界があることをあなたは知っているだろうか。

……という、ぶっとんだ書き出しで始まる一斉を風靡した本だ。その続きは……

住んでいる人間の姿や地理は似ていれども、街の情景は全く違う。

東京という場所には雲をも突き破らんとする高い建物があり、夜の灯りとりやそこでの生活は電気が中心であるとのこと。

逆に江戸は、幕府が極端に外国との関係を持たない政治を続けてきたため、重油などの資源の輸入ができず、炭坑等の資源が底を尽きる心配から電気主体の生活ができない。

故に江戸は、並ぶ建物は木造やレンガ造りの物が多く、夜の街の灯りは店の軒下にぶら下げられた提灯やランタンが主だ。

江戸の街に存在する電化製品といえばテレビのみで、それも江戸の電気の発電量が少ないというのを理由に一家に1台という法律がある。2台目から1台ずつに膨大な税金を納める必要があるため、2台ある家はほんの少し。また、東京に存在する離れたところにいる人とも会話ができる携帯電話という便利な道具も夢のまた夢。

人に乗せて動く鉄の箱：自動車ももちろん江戸には存在しない。だから江戸の人の移動はもっぱら徒歩や馬。

という風に、江戸と東京の違いを書き記し、それまでの歴史や文化を綴る……。そして終盤にさしかかり、江戸の人々が度肝を抜く言葉を、この本の著者は残している。

どうして江戸と東京はこんなにもかけ離れた世界になってしまったのか、それはすべて幕府もとい將軍のせいである。

黄龍と四神の庇護のもと、兵器を使用した他国の侵略を許さず、日本の民に犠牲がなかった点は大いに評価しよう。

しかし、外国を締め出し、外国の秀でた文化を締め出し、テレビといたったひとつの小さなものしか受け入れなかったというのは、電気うんぬん関係なしに民が外国からの影響を受け反乱を起こされるのを避けたかっただけなのではないだろうか。

江戸の現状は、民の幸福を考えず、己の保身に走った將軍の引き起こした最悪の結果ではないだろうか。

確かに、東京という世界では、戦があり…多くの民が命を落とすこととなった。しかし負けたことがすべてではない。得たこともたくさんある。

現に、將軍の消えた世界には自由な東京という街が生まれ、將軍が

残る世界には縛られた江戸という街が育った。…相反する物になっ
てしまったのだと私は思う。

だから声を大にして言おう、『江戸幕府討伐』と。

途中までは確かに面白かった。でも、この最後の一文に面食
らった者は多いはず。

黄龍と四神という伝説の生き物を味方に、天涯無敵の五霊壁しゅれいへきを抱え
る江戸幕府。

太古より日本を守りし神々が味方し、民を守る三護神さんごしんを頭にたくさ
んの神使いを抱える宮家。

東の江戸と西の京に別れつつ、それぞれが役割を果たす彼らに、日
本の民は絶対の信頼と敬意を向けている。

だからこそ、日本を愛し、住み続けたいと願うのだ。だから、江戸
幕府討伐だなんて大反れたことを考えるやつはなかない。

……考えながら歩くこと15分……ようやく目的の場所に着いたらしい……。

“ 山 田 酒 店 ”

久しぶりに見る看板は、相変わらず錆び付いていて、台風でもきた暁には、この通りで一番先にぶっ飛んでいきそうなほどだ。

しかし、

(…… 始まりの土地。)

そう思うと、おんぼろな佇まいも不思議と神々しい光を放っているように見える。

かなりの間、自分の店の看板を見上げたまま動かない客を不振に思ったのか、店主が野太い声をあげた。

「お客さん、なんか用事かい？」

牽制するつもりで掛けた声に、意外にも軒先の客は嬉しそうに身をよじった。

「源さん、お久しぶりですなあ。」

わざとらしく“振袖”で口元を隠してにこりと微笑みかければ、ゲンちゃんと呼ばれた人は盛大に眉を潜めた。

「黄河、やめんか気持ち悪い…。」

「気持ち悪いとは、失礼な物言いですなあ。それに今のわたしは、黄河違います。“お黄”です、オ・コ・ウー！何度同じ事言ったら分かるのかねアンタは。…ああもう、せつかく久しぶりに顔見せよ思つて来ましたのになんでこんなお説教してるの。挨拶よ、挨拶。」

膝を軽く曲げて、醜態をさらさぬよう前身頃を押さえていた手を太ももの上で組み、頭を下げる

「源さん、お久しぶりでございます。」

結った髪にさされていたかんざしの飾り達がぶつかってチリンチリンと可愛い音を立てた。

「お前が店の前にぶつ倒れてんの見つけてからもう1年か…」

月日が経つのは早いもんだな。そう呟きながら、源さんこと山田源
右衛門は茶をすすする。

…店の奥の茶の間に通され、源右衛門と向き合う形に腰をかけたのは5分程前のこと。二人が定位置に着くやいなや、源右衛門の娘の花乃が茶を運んできた。茶を各々の前に置いた花乃は部屋はなのの隅に控えている。

「その節はお世話になりました。働き先まで面倒見ていただいて…」
頭を下げると、再びかんざしがチリンと鳴った。

「いんや、礼には及ばん。こちらも胡蝶に娘を寄越せと言われて洪つていた所だったし、お互い様だ。」

胡蝶さんは客をとりつつ、秀華屋の支配人もしていて、ちょうど1年前に店が人手不足で回らないとの理由で源さんの娘さんを一生懸命勧誘していたのだった。

「源さんに、『ここに行け』って何の説明もなく地図だけ渡されて…、迷いながらようやくやく着いたと思って店入った瞬間『男は呼んでない!!』ですよ。びっくりしました。」

「胡蝶はああ見えて気が荒いからなあ」

「いやいや、突っ込むべきはそこじゃなくて………男の俺を女性の職場に送り込んだところでしょ。」

そう言いながら、眉間を押さえる仕草はとても優雅で、手を上げた際につられて動いた薄い黄色に大輪の牡丹の花を散らせた柄の振袖は黄河によく似合っていた。

「なんやかんや似合ってるじゃないか。花乃もそう思うだろう？」

突然話を振られたにもかかわらず驚くこともなく花乃は微笑みながらうなずいた。

その様子を見て源右衛門は小さくため息をつき、視線を黄河に戻す

「黄河、花乃を嫁にもらってくれねえか？」

「っ！！俺が花乃さんをですか?!」

噴出しそうになった茶を慌てて飲み込んで、一部口の脇から漏れて垂れる茶は手の甲で拭う。

「お前以外にここに誰がいるってんだ。」

「いやでも俺まだ16ですよ、花乃さんだってまだ14歳でしょう……」

口に手の甲を当てたままだった黄河の振袖はするする手首から落ち、

腕があらわになる。

それは、女の子というには遅し過ぎて、男というには頼りない少年の腕だった。

「だいいち花乃さんは俺でいいんですか？」

はっと後方に控える花乃を振り向いて、黄河がそつたずねれば

花乃は頬を朱色にそめて頷いた。

「はい。1年前、はじめてお目にかかったときから、お慕いもつしております。」

(うつ…これは…本気が目だ)

俺を見つめる瞳から目をそらして、彼女の父親に真意を問う

「源さん…。何かあったんですか？」

「どつという意味だ？」

「…あなたのような人が、俺のような1年前にひょっこり現れた記憶喪失の男に大切な箱入り娘を渡すわけがない。」

1年前、この山田酒店の前で意識を失い、源さんに拾ってもらった。目が覚めたのも、この茶の間だった。かろうじて覚えていたのが自分の名前、それ以外は思い出せなかった。

「俺は…罪人かもしれないんですよ？」

誰かを殺して、逃げている最中だったかもしれない。

だが、そんな不安をかき消すように源さんは力強く言った

「それはない。」

「…どうしてそういいきれるんですか。」

「俺の直感がそういつているからだ！」

(…直感って…そんなの信じられるわけがない。)

そんな気持ちを讀まれたのだろうか

「では、当ててやろう。その中身、」

源さんは声に似合った太い指で、俺の脇におかれた風呂敷を指差す

「東京、という本だ。」

「……………どうしてわかるんですか？」

「直感だ。」

包みを開けて、中から本を取り出して差し出した

「胡蝶さんから、源さんに渡すように頼まれました」

源右衛門はそれを片手で受け取ると、脇に投げやり、話題を戻す。

「で、花乃のことはどうなんだ？」

「…すみません…俺には無理です。…いつまでも秀華屋で働けるわけじゃないし、俺には花乃さんに不自由ない暮らしをさせてあげられるか…」

思ったことを正直に告げると、目の前で盛大なため息をつかれた

「……………花乃、これで満足か？」

「…はい、お父様。」

……………後ろを振り向けなかった。

静まり返った部屋の中で泣き声を堪えた花乃さんの苦しそうな息遣いだけがやけに耳に響いた。

俯いたまま、どれだけの時間が経っただろう

静寂を切り裂いたのは、源右衛門だった。

「黄河、」

「……………はい。」

「俺はお前を責めるつもりはない。逆に謝らなければならないんだ。黄河も、花乃も、…今までのすまなかつた。」

大きな体の頭と上半身が、畳に着くんじゃないかというくらい、深い深いお辞儀だった。

上げられた顔には、いつもの勇猛さはない。

「黄河、お前に次の仕事先を紹介する。」

「……………え？」

「秀華屋には花乃をやる。」

ただ一言そう言って、封筒を押し付けてきた。

「お前が嫁にもらってくれれば、花乃を秀華屋にくれてやることもなかったんだが…」

「えっ？ちよつ源さん?!」

「頼まれてた日本酒は、店に分かるように置いてあるから、持ってけ。じゃあな。」

「ちよつと!!」

一方的に話を打ち切られて、源右衛門と花乃は茶の間から出て行ってしまった。

目前で閉められた襖を慌てて開けるも、廊下に二人の姿はすでにない。

茶の間には、封筒と俺だけになってしまった。

「…まじかよ…嘘だろ。」

茶の間から店にうつり、台の上に置かれた日本酒のビンに手を伸ばした。

手に取った一升瓶に貼ってあるメモに目が留まる

（俺が…花乃さんを嫁に迎えば…それですべてが丸く収まるのか？）

そこには丁寧な花乃さんの字で“秀華屋様、お世話になっております”そう書いてあった…。

彼女がもう二度とこの文言を書くことがなくなってしまうのは…俺に責任があるのだろうか？

「黄河様。」

俯いていた顔を上げ、声の方を向くと、優しげな顔の少女が立っていた

「…花乃さん」

「私も父も、黄河様のせいだなんて思っていないません。」

花乃は黄河の手に握られていたピンを取り、貼ってあるメモをはがした。

「私には…はなからこんなもの書く資格ないんです。」

「どうしてそんなこと言うの？」

「…私のこと、本当はご存知なのでしょう？」

その問いかけに答えなかった。答えられなかった。知らない振りをしていたかった。

「…あの人はもう長くない。」

ぼつりとささやいた彼女の瞳が悲しみの色に染まる

「いつか親孝行をしてみたいと思っていました…：ようやくその夢を叶えることができる。」

そういつて苦笑する彼女は俺の返事も待たずして店の奥へと消えてしまった。

…本心がどうかなんて分からない。

でも、嘘だとしても、自分の肩がすっと軽くなった気がした。

それとは一転、帰り道の足取りは非常に重い。

うつすらと積もった雪が溶け、水溜まりやぬかるんだ土で上手く進めず、歩く気力がどんどん削がれていく。

ようやく秀華屋にたどり着いたと思ったときには、すでに客はまばらになっていた

「お黄ちゃん、遅いわよー」

割烹着姿の小太りなおばさんが濡れた手を前掛けで拭いながら小走りで行ってくる

「すみません。山田酒店の旦那さんに捕まっちゃって…」

「ったくあそこの旦那ときたら年甲斐もなく若い女の子引っ掻けようとしてほんとどうしようもないねえ。」

差し出した瓶を、ふくよかな丸い指が呆れながら受け取った。顔の高さまで瓶を持ち上げ貼ってあるラベルを確認、視線を瓶から俺にうつし

「お黄ちゃん、おつかいご苦労様でした。またよろしくね。」

この一言でおつかいが終わる。

“またよろしくね”

俺に次なんてないのに…

「分かりました。失礼します。」

…いつも通りに返事をしてしまった。

いままでありがとう、その一言も言えなくて、いつも通りに厨房と廊下を仕切る暖簾に手をかけた。

背後から聞こえてくる、皿の当たるカチャカチャという音も鍋の煮えるコトコトという音も、ここで働く人達の笑い声も、もう二度と聞くことはないだろう。

(…さようなら。)

きしむ階段をとぼとぼ登る。

(…不思議な気持ちだ)

たった一年しかいなかったのに、この場所を離れたくないと思う

(…これが“愛しい”?)

(…これは“寂しい”?)

もはや、自分が何階にいるのかさえ分からなかった。

「お黄ちゃん。」

ふと名前を呼ばれ、顔をあげれば、階段の先に女性が立っていた。

その人は朱色の壁を背に、漆黒の着物に身を包みこちらを見ている。

「あなた、ここを離れるのが寂しいの？」

「…これは寂しい？」

自分の感情が理解できていない少年に、胡蝶は思わず苦笑する

「いまは分からなくても、いつかわかる日が来るわ。」

1年前に落ち込んでいた彼を慰めたときと同じように、頭を撫でてやろうと近寄って頭に手を伸ばしたがその手は頭に届かなかった…

（…背が伸びたのね）

仕方なく肩に手を乗せ、ぽんぽんと叩く。厚みのある骨ばった肩だった。

（…これからもっと男らしくなる）

一年前ここにきた時は、体の線が細くて心配したものだけど…体はもう心配する必要はないようだ。

あと心配なのは情緒だろうか…彼には、憎しみや怒りはあるものの、悲しみや愛がない。

私には、それを教えてあげることができなかった。

…でもね

「いつか巡り会える。」

あなたに全てを教えてくれる人に、いつか巡り会える。

「だから頑張りなさい。」

「？」

彼の目がきょとんとしたのを見て、思わず顔が綻んだ

「えっ胡蝶さん何で笑うんですか?!」

「何でもない、何でもないのよ」

「何でもないなら笑わないでくださいよ。」

「あらー何これ、恋文？」

白い指が黄色の着物の懐のあわせからちょこんと顔を出していた封筒を掴み取った。

「ちがつそれはっ…あつ待ってくださいよ!!」

手紙を片手に部屋の中に飛び込んだ胡蝶は、静止の声を振り切って、封筒を開いた。

慌てて追いかけた黄河の努力のかいもなく、彼の目の前で乾いた音とともに中から手紙が抜き出された

「黄河くん……これって……………」

黄河へ

まず、私のわがままで振り回してしまったことを謝らなければならぬ。申し訳なかった。

君が胡蝶から聞いているとおり、花乃は胡蝶と私の間にできた子供で、秀華屋で育てるわけにもいかず、私が育てることとなった。

こんな面して、と思うかもしれないが、私は花乃のことが可愛くて可愛くて仕方がなく、胡蝶に秀華屋の跡取りにしたいと言われた時は、はらわたが煮えくりかえる思いだった。

秀華屋のような夜の店に娘を送り込むなんて、耐えられなかった。だから、人手が足りないと言って花乃を欲しがった胡蝶の裏をかい、君に代わりに行ってもらった。

それからしばらく胡蝶も静かだったのだが、ある日、顔を合わせた時に泣きつかれた。私は父親である前に男だった。ただ胡蝶を愛している男だった。だから、花乃より胡蝶を選んでしまったんだ。

私の勝手に君にも迷惑をかけてしまったこと、本当に申し訳なく思っている。君は私たちの顔を二度と見たくないと思っっているかもしれないが、これから何か困ったことがあったら頼りにしてほしい。これは償いではない。たった一年だったが、君を家族のように思っていたからだ。

そこで俺は手紙を奪い取った。いや、意識しなかったのに体が勝手に動いていた。

「……………続きを読ませて。」

「嫌です。」

「何故？」

その問いかけに顔を反らす。

潤んだ瞳が俺を睨み付けていた。

「…嫌なものは嫌なんです。」

手紙を、折り目も気にせず乱雑に折り畳み懐にしまう。

それでもなにか言いたげな胡蝶を振り払うように、裾を翻し襖に手をかけた

「今日はこれで失礼します。」

「ちよつと！黄河くん！」

呼び止める声は聞こえないふり。さすがは胡蝶さんだ、俺とは違って追いかけては来なかった。

自分の部屋に入ると窓を開けて、そのまま窓枠に腰をかけた。

月明かりを頼りに手紙を広げる。息は白いし、手はかじかむ。それでも、蠟燭に火をつけるより早く、読みたかった。

折り皺が多くなってしまった手紙、まっしろな紙に源さんをそのまま表したような力強い字が：胡蝶さんを泣かせた言葉が並んでいる。

（どうしてあんなことをしたんだろう）

手紙を奪い取った理由が自分にも分からなかった。

（…わからない。）

何度読み返してみても、結果は変わらない。…どうやら自分は人の感情を理解する能力に乏しいらしい。

黄河は、諦めのため息をついて、紙を捲り、二枚目を読み始めた

…

…

•

…

•

(…もう朝か)

思い悩んだ夜は呆気なく明けて、小鳥たちも目を覚ましたのかさえずりが聞こえてくる。それは自分で考えていたより随分と清々しい朝だった。

鏡の前で髪を整えてから、小さな荷物を2つ抱えて部屋を後にする。

廊下は、顔をだした朝日でぼんやりと照らされていた。

夜の店の朝は遅く、薄暗い廊下はちらほらと人影が見える程度で、大半の者はまだまだ夢の中だ…。

(早朝の人氣が少ないうちに、誰にも気付かれないうちに裏口から出て、新しい仕事先の“やがみ 桊上”という男と落ち合う…)

足音をたてぬよう静かに歩きながら、手紙に書かれていたこれからの予定を確認する。

こうしていると、実感するな……本当に自分がここを出ていくんだと。

(これで本当に最後だ)

名残惜しくて壁に触れる。冷たくてひんやりしてた。ああ、最後なら調理場も覗こう。

なんて『あそこも、あそこも』と最後の最後であちこち回っていたのは、ただ単に思い出づくりなのか、それともここを離れたくないという潜在意識なのか…自分でもよくわからなかった。

店の中をくまなく見て回って、ようやく裏口に着いたのは、約束の時間を15分程過ぎた頃だった…。

遅刻なんて言語道断、先方は怒って帰ったかもしれない。まあそれならそれでも構わないのだが…。

恐る恐る裏口の戸を開けて顔を出すと、裏口のすぐ近くに見慣れぬ男の姿があった。

……ああ、きつとこの人だ。

「すみません、」

紋付き袴に脇差し姿の男に声をかけると、男が軽く会釈をした。向

こつも自分が待ち合わせの相手だと分かったらしい。

「私、塚井家の家臣で埜上と申します。」

動く度、長い前髪がさらさらと流れるその姿は、まるで絵巻物の中から飛び出してきたように様になっていた。

俺は、一瞬見とれていたのを悟られないように、慌て繕った。

「黄でございます。此度は遅れまして申し訳ありません。」

「構わない。」

埜上は一言そついつと、遠くの空に佇む江戸城の方角へと歩き始めた。

二人の足音が夜明け直後の静まり返った江戸の町中にやけに響く。

やはり遅刻したことに腹を立てているんだろうか。

ちらり、横顔を伺ってみたものの

(何を考えてるのか全くわからない)

整った横顔には隙がない。瞳はまっすぐ前をみつめ、大きな手は刀に重ねられている。前髪と後ろでひとつに束ねられた髪だけが気ままに風になびいていた。

見るからに育ちが良く賢そうで、背はすらりと高く容姿にも欠落がない、こういう人を美男子というのか…。

自分で言うのもなんだが、俺も不細工と言われたことはない。むしろ、綺麗な顔をしているともてはやされたものだ。

…しかし、こつも完璧な人間を見ると正直凹む。…挫折というか…屈辱というか…少し羨ましくなるもの…だあつ?!

思考は停止し、体が反射的に後ろに跳び跳ねた。そして目で自分の髪の毛がぱらぱらと地面に落ちていくのを確認する。

「…埜上様と仰いましたっけ？」

道の真ん中には風呂敷に包まれた荷物が2つ。それを挟んで俺は埜上と向かい合っていた。

「こんなところで物騒ですね。」

埜上の手に握られている鈍色に輝く抜き身の刀を睨みつける

「まあ売られた喧嘩は買いますけど。」

とは言ったものの、いまの太刀筋を見ればわかる。この埜上という男、ただ者ではない。あと少し避けるのが遅ければ前髪だけでなく、体もろとも切られていたことだろう。

間合いをとったまま、中腰の臨戦態勢で埜上の筋肉の動きひとつひとつに注意する。これだけの手練れに真っ向から勝負を挑まれたら、丸腰の自分に勝つ術はなかった。

どう逃げ切ろうかと思いついてみると、埜上は何事もなかったかのように刀を鞘に戻し再び歩き始めた

「能力は問題ないようだな。ついてこい。」

そう言った彼からは、先程まで滲みでていた殺気が消えていた。

「え、ちょっ…埜上様?!」

なんだかもう状況が理解できないが、どンドンと離れていく背中においていかれぬよう慌てて追いかける

「あの…先程のは一体何だったのですか？」

「剣客としての才能を見た。」

「け、剣客…？」

もう自分がこれからどんなことに巻き込まれるのか、心配でたまらない。

源さんからの手紙に女の格好で女として生きると書いてあったから使用人の仕事だと思ったもの…暗殺の仕事だったらどうすればいいのだろう。

「心配には及ばない。お前の仕事は護衛だ。」

「…護衛ならば男性の方がよろしいのでは？」

「ますらを。」

「は？」

思わず顔をしかめてしまった。この人は一体何を言っているのだろう。

俺の様子を気にすることなく、埜上は目を閉じると手のひらを俺にかざす

「お前から、」

次の瞬間開かれた埜上の瞳に、一瞬だけ強い光が宿った気がした。

「益荒男の気配がする。」

「いつからです?」

いつから俺が男だと気付いていた?

少しだけ恐怖を覚えて横顔を睨みつけても、埜上は初めて会った時から少しも変わらない冷ややかな表情で、まっすぐ前を見ていた。

「女の振りをした男の方が護衛には好都合。よろしく頼む。」

返ってきた言葉は答えになっていない。

………始めから、ということか………。

そして再び静寂が訪れた。

どれくらい歩いただろう

秀華屋を出たときには、遠くの空に佇んでいるように見えた江戸城が、地面からしつかりと建っていると分かるまでに近くなり、

繁華街を抜け町並みはがらりと変わり、辺りは武家屋敷の連なる一画となっていた。

下流階級の屋敷を過ぎ、階級が高い者の屋敷に近づくとつれ徐々に屋敷が大きくなっていく

そこで初めて、桮上が自ら口を開いた

「お前の奉公先は、塚井家の別宅。」

「塚井家……」

聞いたことがあるようなないような……中堅の家系だろうか？

「塚井家は旦那様のお仕事の都合で、御一家で京にお住まいでしたが、『武士の子たるもの江戸を知るべし』という旦那様のお考えで、塚井家で唯一、京で生まれ京で育ったという末の姫様がこちらの別宅に移り住まれた。」

「……お一人ですか」

「……塚井家の方はいらっしやっではないが、使用人は私を含み京の本宅から5名。使用人はあとで紹介するとして、まずお前の主と

なる姫様のことを覚える。お名前は

「

俺が遣えることとなったお武家のお嬢様のお名前は、

塚井^{つかい}
星華^{せいが}

武士の娘でありながら、京で生まれ育ったが故に気質が完璧な京女で、家庭教育を受けて育ち、京のお姫様らしく家の中でゆったりと育てられたという正真正銘の箱入り娘。

父親の教育方針に巻き込まれ単身江戸にくんだり、昌平坂学問所へ通う………はずが

「学問所に行くどころか、お屋敷から一歩も出てくださらない。」

そういつて桢上は眉間に皺を寄せた。

“武士の子ならば、江戸を知るべし”というくらいなら、たとえば場所が京だとしても江戸気質のお嬢様になるよう育てなければならなかったのではないかというツツコミはさて置いて

俺は理由を問う

「ホームシックですか？」

「そうではない。…ここはあの方が育ってきた環境とはあまりにも違いすぎる。」

どこかで聞いたことがある。同じ陸続きでも、東と西ではまったく違うのだと。

俺自身は京に行ったことはないものの、同じ賑わいでも、江戸はガヤガヤで京はワイワイなんだそうだ。

そんなことを話している間に、屋敷に着いたらしい

「今日からここがお前の家になる」

黒い瓦に、木製の扉、重厚感たっぷりの門の向こう、白い壁の眩しい屋敷だった。

案内されるがまま中に入れば、武家屋敷らしい外観と同じように、さっぱりと清潔感のある装飾の数々が俺を迎えてくれた。

…なにげなく花が生けられたこの壺もきつとお高いものなのだろう。

長く続く廊下をぐんぐん進むと、徐々に甘い芳香が漂ってきた

それは、甘味のような感じではなく、花の香りでもない

きつ過ぎず、ほのかに香る上品な匂いだった。

行き着いた先、芳香の元で、

桮上は立ち止まり襖の向こうに声をかける

「桮上、ただいま戻りました。」

「……………」

…しばらく待つても中から返事はなく、ただ一度、コロン　と鈴の音が聞こえてきただけだった。

「……………失礼いたします。」

掛け声とともに少しずつ開かれていく襖　　部屋の中から何か神々しいものを感じて俺は咄嗟に平伏し、堅く目を閉じた。

「姫様、これがお話しした新しい召使いです。」

「お初にお目にかかります。」

脇に座る桮上から、顔を上げると声がかかる

「黄と申します。」

目の前は、桃の節句と間違いそうなほど華やかな世界だった。

白い肌は透き通り、伏せ目がちな大きな瞳と光に輝く艶やかな髪は

漆黒。

緋の袴に、細部まで彩飾された衣。江戸ではなかなか見ることがないこの着物は十二単といっただろうか…。

普通なら畳張りの部屋も板張りに変えてあり、部屋の調度は完璧に京のもので揃えてあった。

「…はじめまして。」

ふっくらとした紅い唇から、紡ぎ出された声は小鳥のように愛らしい。

「私は星華。これからよろしくおねがいします。」

そう会釈した彼女の肩から、髪がひと房流れ落ちる

「…お黄……………お黄!」

「え? あ…い、痛い!」

頬に猛烈な痛みを感じて目を覚ますと……………埜上が凄まじい笑顔で、俺の頬をつまみ上げていた。

「こら、埜上。女の子に無礼をはたらいてはなりません。」

「いえ、この者の頬に虫が止まっておりました故。」

ようやく手の力を緩め、離れていく間際

「見とれるな。姫様に手を出したら殺す。」

周りには聞こえない小さな声でやが呟いた

(…こ、殺すって)

恐怖に震える俺を横目に、埜上は素知らぬ顔で部屋の中へと入っていく

「お黄はこう見えて腕もたつのですよ。男の私ではお助けできないとき、きつとお黄が姫様をお助けします。」

「それは頼もしいですね。」

「では早速、明日から学問所へ」

「姫様、」

「体調が芳しくありません。」

姫様は埜上の問いかけに血色の良い艶やかな顔でそう答える。

これの繰り返しがもう30分……学問所の始業時間に合わせて起床し支度をしたのに、これでは遅刻だ。

「それは大変、療養しなくては。」

冷やかな埜上の眉間にシワがよる。

「と、私が言つとお思いですか？」

「……………思いません。」

埜上はため息をついて、脇に立つ俺に目を向けた

「俺は所用があつてもう行かなければならない。後はお前に任せた。」

「え、私ですか?!」

部屋から出ていく直前、埜上が姫様に振り返る

「あなたは何故ここにいるのです？」

問いかけておきながら、答えも聞かずに颯爽と消える。

…埜上様、キザすぎる。というか残される俺の気持ち考えてくれ。

「…えーと姫様、今日は、江戸の町を見てまわりませんか？」

どうせ授業に間に合わないなら、さぼってしまえなんて安易な発想だった。

「江戸の町？」

「ええ。町を見れば、江戸の人々のことが少しでも分かるのではないかと。」

「町を見れば人がわかる……」

彼女は少し悩んでから首を縦に振った。

「…それでは、案内をお願いします。」

空は高く、澄みきっていて、散歩に絶好の日和だ。

「お黄、あれは何ですか？」

昨日とは一転、江戸の娘らしく振袖をまとい、髪を高く結い上げた
姫様があれは何かこれは何かと続けざまに質問してくる。

「あれは質屋、姫様には無縁の場所ですよ。」

「…あれが質屋。」

姫様は関心して頷く

「姫様、」

「…なんですか？」

どうしたんだらう、顔色がよくない…。

「少し休みましょう。」

「え、ちょっと、お黄、」

主の返事も待たずに、腕を掴みぐいぐい引っ張って行く召し遣いに
姫様は困惑していた。

「お、お黄っ…どこに行くのです…。」

俺の背後で、姫様が息を切らし始めたころ、ようやく茶屋の暖簾が
見つけた

「一休みしましょう。」

肩を掴めば驚くほどに細くて、少し力を加えただけで華奢の体は茶屋の腰掛の上に崩れる

「…ここ、ここは？」

肩で息をしながら、不思議そうな顔で俺を見上げた。

…茶屋も知らないときたか。

「ここは茶屋です。」

「これが茶屋…。」

「それより、顔色が優れないようですが大丈夫ですか？」

座ってからほんのりと赤みが戻ってきたものの、今朝の顔色と比べるとやはり青白い。

「慣れないことをしたので疲れているだけです。」

「慣れないこと、ですか？」

俺は彼女に何か特別なことをさせているだろうか…ただ散歩に出ているだけなのに…

考え込む俺の隣りで、彼女が恥ずかしそうに呟いた

「あるいているから」

「…え？」

…思わず聞き直せば、今度ははっきりと申告した

「歩いたので疲れました。」

「…は、はあ。」

…若干、いつもより語尾がきつい気がするのどうしてだろう。というより、まだ屋敷を出てそんなに歩いていないのに…それだけで顔色が悪くなるものなのか？

「…京では」

ぼつりと呟いた彼女の顔が少し翳る

「土に触れる機会がなかったのです。いつも屋敷の奥深くにある部屋でひっそりと暮らしていましたので。」

「…箱入り娘というものですね。」

「…そういえば聞こえはいいかもしれませんが、所詮は籠の鳥です。それも私は性格の悪い鳥でした。」

そういつて自嘲的な笑みをもらし、整った顔を悲しげにくしゅっと崩す

「陽の光の入らない場所に閉じ込められて隙間から微かに見える空を羨ましく思い、私のためにと会いに来てくれる大切なひとたちに

八つ当たりをしたのです。」

「…あなたが？」

そんなふうには、見えなかった。優しそうな瞳でいつも朗らかに笑っていきそうなのに。

「私は貪欲な人間なのです。私のために会いに来てくれていたのに、空の下を自由に歩いている彼らが羨ましくて、言うてはならないことを言ってしまったことも、連れ出してくれとわがままを言って困らせたこともありました…。」

ひざの上で組まれた彼女の手は、太陽と出会ったことのない月のように真っ白な肌だった。

「ということ、私は歩くのが苦手で…心配をかけてしまいましたね。」

「いえ、理由が分かり安心いたしました。…下層の者からは羨ましがられているけれど、実際の生活は、両親からの期待、跡目争い、家臣からの重圧、色々なことに追いかけて決断して楽しいものではないですよ。良家に生まれるのも大変です。」

横からじっと見つめられて気がついた。

(…余計なことを喋ってしまった)

「まるでその経験があるような言い方ですね。」

「え、いや…その…」

(……………これは非常にまずい。)

秀華屋で匿ってもらっていたとき同様、記憶喪失という設定だったのじ。

…どう対処するべきか、額に手を寄せた瞬間だった。

「誰にでも隠したいことはありません。」

「え?」

「私も、先ほどお話ししたこと、知られたくない過去のひとつなのです。」

一陣の風が吹き、彼女の後れ毛をさらっていく。

(…こんなに近くにいるのに、)

どこか遠くを見つめた彼女の髪は陽の光で輝き、整った顔の肌は明るく照らされる。その姿はこの世のものとは思えぬほどに美しかった。

(…凄く遠くに感じる。)

「『姫たるもの清廉にして美しくあれ』、隠したい醜い過去なんて本当は私に存在してはいけなかったし、口外してはならなかったのですが」

「大変お待たせしましたー」

そこでようやく団子とお茶が届けられた

「私も人間ですので、思わず口が緩むこともあります……父上に叱責されてしまいますね。あなたもそうだったのでしょうか？」

そう言った彼女は、団子を口に運ぶ仕草さえ、美しかった。

「さて、そろそろ戻りましょうか」

青い空は紅に染まり始め、快調だった足取りも亀が歩くくらいに遅くなった。

とぼとぼと前を歩く彼女の背中中は細く小さくて、後ろを歩いている俺の影で体がすっぽりと隠れてしまっくらいだった。

「……た。」

「え？なんですか？」

「……ました。」

こちらに背中を向けている上、ざりざりと土を踏みつける音が邪魔をして、彼女の小さな声を掻き消してしまっ。

『人に何か話すときは、相手の目を見なければなりません。』

そう言われ続けていたのを思い出して、彼女の肩にそっと手をのせる

「すみません、よく聞こえないのですが」

少し力を加えて振り向かせれば、彼女は一瞬だけ驚いた顔をしてからまっすぐに俺を見つめる

「あなたは誰。」

「…え？」

「桮上は、貴女を“拾った”と言っていました。ですが…彼は、そんな人ではない。」

「“そんな人”？」

「…見ず知らずの…身元も分からない者を、私の傍におくはずがない。」

伏せた瞳は、長いまつげに隠されてしまう

「…あなたの主は私です。だから、教えて」

再び戻された視線に射抜かれる。

「あなたは、誰？」

どこまでも深い漆黒の瞳。

「答えて、あなたは誰？」

「私は黄です。」

『あなたはあなたであることを隠さなければならぬ。』
しわがれた声の老人がまじめな顔で何度も何度も、耳にたこが出来るくらい俺に言った。だから…知られてはならない。俺が俺であることを。

「言いなさい。」

耳元で囁かれた言葉が、頭の中にやけに響く

視界がぼやけて、やがて何も見えなくなった。

「これは命令。」

…苦しい

「…っ」

息が出来ない。

まるで首を締められているようで、息苦しさは声にならない声もれる。

「お…俺は…黄河。」

「そう………“俺”…なのね。家はどこ？」

…家は……あそこだ

「家は…江「やめる五月さつきっ！！」

誰かの叫び声が聞こえて……俺は、ふつりと意識を失くした。

それはとても不思議な風景だった。

見目麗しい若い男女が3人、道を歩いている。：いや、正確には歩いているのは2人で、1人は男の肩に担がれている。

「…どうしてこんなことをしたのです」

肩からずり落ちてきた黄河を乱雑に担ぎなおして、埜上は心底迷惑
そんな顔で星華を見る

「隠すから。」

「え？」

「あなたが隠すからです。」

星華は、埜上の肩に担がれている黄河を指差す

「あなたが連れてきたその者、男でしょう。」

「……何を言い出すかと思えばそんなことですか。」

「そんなことじゃないわ！！朝霧^{あさぎり}、あなたはいつもそう、私には何一つ言ってくれないじゃない！あの時もそうだった！何も言わないで勝手にいなくなつて…残された私がどんな気持ちだったか…」

「っ……」

彼女に“朝霧”と呼ばれたことで、心の奥深くにしまっていた開けていけない箱の蓋が開く

長いこと誰も口にしなかった、昔の自分の名前。

『この赤ん坊…今、瞳がつ…』

『なんと汚らわしい！裏切り者の息子が！』

『…気安く父と呼ぶな。私はお前の父親ではない。』

『ごめんなさい。母さんが悪いの、ごめんなさい。』

『あつちいって！お母様が、あなたとだけは一緒に遊んではいけないって、穢れがうつるって。』

誰一人、俺を朝霧と呼ぶ人はいなかった。どこを歩いてても煙たがられ、聞きたくもない陰口が耳に入り、軽蔑の冷たい視線が体中に刺さる。誰からも見られたくなくて長く伸ばした髪を顔の周りにうつそうと垂らして、いつもうつむいていた。

…そんな俺が、始めて空の色を知ったのはあなたと出会ったとき

『あなたお名前は？ 朝霧、素敵なお名前ね。私は五月。』

向こうに綺麗な藤の花が咲いているの、一緒に見に行きましよう。』

朝早く、手を引かれて連れて行かれた先に、これでもかと美しく大輪の花を咲かせる藤を見た。薄紫で、風にふわふわと揺れていた。初めて見上げた空は高く澄んでいて、陽の光が水溜りに反射して水面がきらきらと輝いていた。

『朝霧、また一緒に遊びましようね。』

初めて言われたその言葉に何度も何度もうなずいたんだ。

「ねえ聞いてるの、朝霧。」

「……お願いです。もう朝霧と呼ばないでください。」

これ以上、あなたの柔らかい声でそう呼ばれたら、無理やり閉じ込めたこの想いが溢れ出して、あなたを困らせてしまう。

「その名前は嫌いなんです、あの場所に固執しているし、あの頃を思い出すから……。」

「……では今の名はどうなのです、胤^{つぐと}淑。朝霧も胤^{つぐと}淑も同じでしょう。」

普段おとなしい彼女はいらだった目で俺をにらむ。

「ふう… 本当にあなたには口では昔から敵わない、五月。」

昔からそうだった、星華は…いや、五月は体は弱いけれど口だけは達者で、いつも負かされていた。

でも…そんなふうにくちくちできたのも、俺たちが出会ってから3年くらいだったか…。そう思うと少し嬉しくなって、思わずふき出してしまふ

「なんだか懐かしいな。」

そんな俺に対して、五月は不機嫌そうに口を尖らせたままだ

「何を笑っているのです？」

「失礼、失礼。こうやって、また口喧嘩できたことが凄く嬉しくてつい。」

「そうね、私も嬉しいわ。もう二度とあなたとこうやって面と向かってお話しすることはないと思っていたから。」

「そうですね。あの方が、あなたの江戸行きのお供に私を選んだと聞いた時は驚きましたよ。」

「父上が何を考えているのか…さっぱり分からない。」

珍しく不安そうにしている彼女がどうしようもなく愛おしい

「何があっても、必ず俺があなたを護ります。だから俺を信じて、五月。」

「頼もしいですね。ああ、それと、私のことももう五月と呼ばないでください。」

「え？どうしてです？」

驚いて隣を歩く彼女を見れば、凜とした顔を前に向けたまま、視線だけこちらに動かす

「五月は幼少の頃の呼び名です。私はもう女性として数えられるようになってしまったので。今後はきちんとお呼びなさい。」

「…女性って…まだまだ子供のくせして。」

「いま何か言いました？」

「いいえ、何も。さ、早く帰って夕餉にいたしましょう。」

ようやく見えてきた屋敷の門、まだ慣れないけれど、これが我が家。

「おい、お黄。いい加減起きろ。」

「うゝ…」

「本当にどうしようもない奴だな…荒治療になるが、起きないお前が悪いんだ。」

意外とがっちりとした黄河の体を支えていた腕を放すと、重力に従い地面に落ちて砂埃が舞った

「痛っ！！」

「おはよう、目が覚めたか？」

「…埜上様？つてここ…え？俺さっきまで市場に…え？」

「馬鹿かお前は。」

このとき、俺はまだ知らなかった。

隣りで笑う彼女を、いつまでも自分だけのお姫様だと信じていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8192x/>

マロなお嬢と、召使い。

2012年1月2日01時50分発行